

# 反障害通信

21. 7. 18

109号

コロナ感染症対策の論点整理⑧

## コロナ感染症対策の非論理性

### オリンピック対応の分科会有志の提言の記者会見

オリンピック対応について、分科会の尾身会長が提言を出すといっていて、なかなか出さず、結局政府がオリンピック開催、しかも観客を入れての開催の方針を出してから、提言を出した後に、記者会見を開きました。それで、尾身会長はもうすでに開催をサミットで宣言したのだから、開催についての提言はしないとしていたのですが、そもそもそれならば、政府の方針を出す前に提言を出さなかったのか、という問題です。政府から圧力がかかったのなら、そのこと自体が大問題だし、そのことを明らかにして抗議することです。

わたしが尾身さんを最初にテレビで見たのは、安倍前首相がコロナウィルス感染症対策として専門家会議にも諮らないで最初にやった意味不明の処置——学校の一斉休校の後、批判渦巻く中で、テレビに出て安倍前首相擁護の発言、ポイントが外れているという批判をしないで、「アナウンス効果がある」と話していた時でした。それを見て、これまでの多くの専門家会議の類いのことと同じように、これも付度会議になってちゃんと機能しないだろうと、まさに先行き不安におそわれていました。その後、結局安倍政権から菅政権に移行しても、政府が専門家会議をいいように使い、専門家会議は付度を重ねてきたのですが、このままでは自分たちが責任を負わされると、抵抗も示してきていました。ですが結局付度専門家から抜け出せていないのです。

### 専門家の非論理性

さて、この記者会見には、大東文化大学の中島さんも出席していました。確か、分科会のメンバーではなかったと思っていたのですが、このひとは、このコロナウィルスの問題が始まったころ、テレビに専門家として出て発言していたのですが、その内にほとんど出なくなりました。話がどうも政府の無策への擁護・付度的になっていたのです。インターネットで検査を上げることへの反対の主張を展開していて、それがかなり拮がっているようでした。その主張が非論理的なのです。検査をしても偽陰性が出て、そのひとたちが動き回るから、逆に感染を広めることになるという趣旨なのですが、意味不明です。そもそもテレビで「陰性証明書」などという言葉が流布しているのですが、「陰性証明書」というのは感染していないということを証明するものではなくて、あくまで一回の検査で陰性であったという事実を書いているだけで、「陰性証明書」という言葉を使うべきでなく、もし使うとしたら「仮証明書」にすぎない、とすることです。こういう言辞をきちんと専門家と言われるひとたちが、自分たちの責任において批判して、民衆の間で衆知徹底していくことなのです。そういう専門家としての責任をネグレクトして、感染症対策はすべては検

査から始まる、ということなのに、そしてもっとも負荷の少ない有効な対策としての検査を選択肢から排除してしまう、非論理的な主張をなぜ、続けているのか分かりませんでした。そのみならず、感染症の専門家の中で、まだそれなりの位置を占めていて、こういう記者会見に顔を出していることがどうしても分からないのです。

この記者会見には東北大学の押谷さんも出ていました。このひとは専門家会議のクラスター班の中心にいたひとです。今、このひとが「クラスター対策は、検査態勢がきちんと作れない間では、有効な手段であった」という発言をしているようです。どうも、NHKの番組で「世界に誇る日本のクラスター対策」という発言をしたことを忘れたかのようです。確かに、このひとは検査を拡げることには反対はしていません。しかし、検査を拡げようという方向できちんと動いていないのです。そして、未だに、日本ではクラスター対策としての検査が軸になっていて、検査数を増やす増やすといっているのですが、実際増やしていません。どうも、「世界に誇る日本」という国家主義的な指向性のある安倍前首相が「世界に誇る日本のクラスター対策」に食いついて、感染経路不明が半数を超えても、クラスター対策だけでは押さえ込めないとと言われて、検査を増やすと言い出しても、まだこのクラスター対策中心から抜け出せていないのです。責任感の強いひとなら、自分の言が引き起こしている事態に責任を感じて、転換を提起するのですが、そのような反省もなく、自分の言の方を装飾して自己弁護・正当化しています。

このような事の中で、日本の感染症対策の失政が続いているのです。

#### **FACEBOOK のワクチン関係投稿への貼りつけ**

さて、非論理性の例として、ワクチン関係の投稿をしたときに、その投稿に **FACEBOOK** が貼りつける文書の話をしておきます。わたしが、コロナウィルスのワクチンへの疑問に思っていることを **FACEBOOK** に投稿したとき(本号 109 号の「インターネットへの投稿から」参照)、**FACEBOOK** が貼りつけてきた文書があります。

**FACEBOOK** のロゴの後に

「新型コロナウイルス感染症のワクチンは、多数の臨床試験で安全性と有効性を確認されたのち、注意深くモニタリングされています。／出典：世界保健機構(WHO)」

そして、その下にある「[ワクチン情報を見る](#)」をクリックすると、次のような文が出てきます。

## **新型コロナウイルス感染症情報センター**

### **新型コロナウイルス感染症に関するファクト**

これらは世界保健機関(WHO)が発表している正確な情報です。同機関では、新型コロナウイルス感染症に関する風評などの真実でないうわさを訂正しています。

### **ワクチンは徹底的に安全性を確認してから一般市民に提供されます**

ワクチンが国内で導入できるようになるまでに、広範な治験が行われます。専門の医師や科学者が厳しい国際基準に沿って、ワクチンの承認を決定します。他の医薬品と同様にワクチンも副反応が生じる可能性があります、

多くの場合、副反応は軽微で一時的なものです。人に深刻な害を及ぼす可能性に関して言えば、ワクチンよりもその病気自体の方がはるかにリスクが高いのです。

出典: [世界保健機関](#)

### **新型コロナウイルス感染症ワクチンは、最高の安全基準を守りながら迅速に開発されました**

新型コロナウイルス感染症ワクチンは緊急で必要だったため、政府や企業は開発のために多額の資金を投じました。厳格な安全基準と臨床基準を守りながら、世界中で研究開発が同時に進められました。これにより、より迅速な開発が可能になりましたが、研究の厳格さとワクチンの安全性が損なわれることはありません。

出典: [世界保健機関](#)

### **ワクチンの副反応は一般的に軽度です**

ワクチンは特定の疾患から身体を保護するのに役立ちます。あらゆる医薬品と同様に、身体がワクチンに順応するまで、腕の痛みや微熱など軽度の副反応が短期間生じる可能性があります。より重度の副反応が生じる可能性はありますが、きわめてまれです。人に深刻な害を及ぼす可能性に関して言えば、ワクチンよりもその病気自体の方がはるかにリスクが高いのです。

出典: [世界保健機関](#)

これはわたしの投稿だけに付けられたものではなく、ワクチンという文字の入った投稿全般に行っている節があります。「同機関では、新型コロナウイルス感染症に関する風評などの真実でないわさを訂正しています。」とありますから、「非科学的な」投稿に警鐘を鳴らすということなのでしょうが、これら文章自体が、「非科学的」なのです。

まず、「新型コロナウイルス感染症のワクチンは、多数の臨床試験で安全性と有効性を確認されたのち、注意深くモニタリングされています。／出典：世界保健機構(WHO)」ですが、そもそもこのワクチン開発は、通常二・三年かかるワクチンの開発を一年もしないうちに打ち始めたということがあります。ワクチンに「特例承認」ということばがあるかどうか分からないのですが、ともかく「特例」なのです。これまでの通常の「臨床試験で安全性と有効性を確認」ではなくて、単に「多数の」なのです。「注意深くモニタリングされています。」だけで、とにかくやってみて、後から検証するということになっています。「これは、おおがかりな人体実験だ」という指摘も出ています。

さて、引用の後半の細かい文言の非科学性の指摘をします。「人に深刻な害を及ぼす可能性に関して言えば、ワクチンよりもその病気自体の方がはるかにリスクが高いのです。」こういう書き方がまさに非「科学知」的な表現なのですが、現実にはワクチン接種後の死者が出ています。これは、「接種と死の関係はあきらかではないけれど、接種がもたらしたこととすることを排除しきれない」という主旨のことを発表しています。「ワクチン接種で死んだひと」として「ワクチンよりもその病気自体の方がはるかにリスクが高いのです。」とは、とても言えません。

健康機器や健康食品のテレビコマーシャルで、効能を発言した後に、よく「これはあくまで個人の感想です」という表記が出てきます。「ワクチンよりもその病気自体の方がはるかにリスクが高いのです。」という文言には、接種後に死者が出ているとき、死者やその家族にとってそんなことが言えるのでしょうか？ その情報もきちんと書き加える事です。その上で「これ

はあくまで個人の感想です」との但し書きが必要になることではないでしょうか？ しかも、検証は早発性の副反応しか問題にできません。痛みとか、発熱、頭痛とか、すでに副反応は出ています。それらは氷山の一角ともとらえられます。しかも、mRNA を使った「遺伝子操作」ワクチンです。少なくとも日本では、遺伝子組み換え技術を使った商品にはその表示はまだ義務づけられています。その安全性の実証はまだなされていないから、義務づけられているのではないのでしょうか？ このワクチンの承認は特例的処置なのです。そのことが、きちんと書かれていません。むしろ、「厳格な安全基準と臨床基準を守りながら、世界中で研究開発が同時に進められました。これにより、より迅速な開発が可能になりましたが、研究の厳格さとワクチンの安全性が損なわれることはありません。」と、ちゃんと安全性が担保されているようにとらえられることが書かれているのです。

わたしは、これらの情報発信の仕方を見て、想起したことがあります。それは、二〇一一年のフクシマ原発事故前の一月に、テレビで「原発が危ない」などと言っているのは、非科学的だ」と言っているひとがいました。それから二ヶ月もしないうちにフクシマ原発事故が起きたのです。原発の安全神話というようなことが作られていたのです。原発事故の後に作られた原子力規制委員会で、その初代委員長の田中俊一さんが、「わたしは原発は安全とは言っていない。規制委員会は作られた基準に適合しているかどうかを審査しているだけだ」と言葉を弄して、事故後の再稼働を認めていったという信じられないことを想起しています。「既成委員会ではなくて推進委員会だ」という批判が起きています。

わたしは WHO の情報の発信の仕方を見てみると、ここに引用した WHO のワクチン指針、単に FACEBOOK が示威的にその文言を並べているだけかもしれませんが、医薬品の安全性を審査する機関としての役割をちゃんと担っているようにはとらえられないのです。まるで日本の原子力規制委員会と同じような「役割遂行」(実は「役割放棄」?)です。

今、テレビで、「打つ——打たないは個人の選択です」とか「打たないひとが差別されることはないように」と言いつつ、ワクチンが対策の要だとか、テレビが「皆でワクチンを打ちましょう」みたいなことを広めているとしか言いようがないことになっています。ワクチンの安全性神話が作られてきている。また、ワクチンファシズムのような事態になりかねないと危惧しています。

きちんとした情報の開示と整理が必要ですし、マスコミ、SNS などのソーシャルメディアの役割は重大だとも思っています。

#### **オリンピック組織委員会やオリンピック関係発言の非論理性**

オリンピック組織委員会のメンバーが、「国民に理解を求めていく」ためにと、テレビに出ているいろいろ発言をしているのですが、結局「努力しています」ということしか言いません。努力すれば解決する問題なら、努力しているかどうかは問題になりますが、問題はちゃんと安心安全な大会になるかどうかの判断と、そのようにできるかどうか、なのです。これまでの右往左往ぶりを見ていると、このひとたちには、感染が広がっている状況でのオリンピックの開催、運営は無理だとは思えないのです。

さて、久しぶりに開かれた党首討論で、オリンピックの意義を問われた菅首相は、自分が高校生だったときの東京オリンピックの思い出話をしていました。前述したように、こういうときは、「これはあくまで個人の感想です」という文字を挿入するところです。政治

家が、自らの政治的責任において応答するところを、焦点ずらしの応答です。いまこれは、今「やぎさん論法」として取りあげられています。相手の質問を食ってしまって、自分が個人的にしゃべりたいことをしゃべるといふ手法です。しかも、以前の東京オリンピックの時は、感染症が広がっているという状況はなかったのです。危機意識が全く欠落しているのです。菅首相は、サッカーや野球で開催してやれているのだから、オリンピックもやれるとか言っています。どうも、サッカーもオリンピックも選手の間で感染者が出て、一時離脱している現実もつかんでいないようです。リーグ戦のスポーツは一時的離脱ということで復帰できますが、オリンピック選手は、間近や期間中に感染したらもうオリンピックはお終いです。感染症対策がもっと厳密にされることですが、どうもそのように進んでいません。

さて、政府批判の即応性、自分ができそうにもないことを他者に求めるべき事ではないのですが、野党もマスコミも突っ込みがない、甘いのです。

とても、穴の空いたバケツで右往左往している様子を見ていると、これは大変なことになるそうだという思いが拭いきれないのです。危ういと思ったらやらないというのが「危機管理能力」のあるひとの方針です。

こういう危機の時代は、自分できちんと情報を集め、きちんと自分で考え、そして周りのひとたちにきちんと訴えていく、問題の解決の道筋を探していく、という基本的なことに立ち返った行動が必要になっているのだと思います。自らに課すこととしても、ここに記してみました。

(み)

〔「反差別原論」への断章〕(36) としても)

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 109 号」アップ(21/7/18)
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

## 読書メモ

古典というジャンルに入れている読書過程で、補足して読む必要を感じて古本で買い求めた本の読書 2 冊です。ラーヤ・ドゥナエフスカヤの本は、危うく途中で投げ出しそうになったのですが、この本は、むしろ運動史や論争史的にかなり興味深い本になっています。ただ、むしろ批判的に読み解きました。本の紹介というより、本との対話を通じたみずからの理論的深化にかなり重点を移してきています。関心を持たれた方は、直接本にあたってください。

・K・コルシュ／木村 靖二・山本 秀行訳『レーテ運動と過渡期社会』社会評論社 1971

コルシュは、マルクス・レーニン主義から異端的な流れの中で挙げられている3人のひとりのようです。3人とは、ルカーチ、グラムシ、コルシュとされているようです。ルカーチはマルクスが突き出した物象化という概念を再度掘り起こしたひと。グラムシは前の前の読書メモで取りあげたのですが、どうも「マルクス・レーニン主義から異端的な流れ」とは言えないようです（この本の編者のグラムシへの言及 16P）。ただ、初期の工場評議会運動に関わっていたグラムシは、評議会運動というところを展開していけば、別様な展開になっていくと思えます。この評議会運動の評議会ということが、コミューン、ロシア語ではソヴィエト、ドイツ語でレーテといわれています。この本のタイトルにして展開しているのが、この本の著者コルシュです。

「マルクス・レーニン主義」の「社会主義革命」は、武装蜂起——国家権力の奪取——（プロレタリア独裁権力の樹立としての）ソヴィエト（評議会）政府の樹立という図式になっています。

そして、コルシュはエンゲルスの有名な「よろしい、諸君、この独裁がどんなものか諸君は知りたいのか？ パリ・コミューンを見たまえ。あれがプロレタリアートの独裁だったのだ」142Pを引用しています。ただ、コルシュは、このパリコミューンはブルジョア自由主義的革命でしかなく、しかもマルクス派が領導した革命ではなく、アナキストが牽引した革命だったと押さえています。コルシュは、定式化されている共産主義のイメージを民主主義的な形態にとらわれないで中身をとらえるべきだとしています。コルシュは、マルクス・レーニン主義の国家権力の奪取という上からの革命ではなく、むしろサンディカリズム的な下からの革命の志向をとっていたようです。そのモデルを、スペイン革命時の評議会運動とも言える自主管理運動を取りあげています。さて、これは「たわしの読書メモ・・ブログ 513 ・山内明編『ドキュメント現代史〈7〉スペイン革命』平凡社 1973」でとりあげていたことです。スペイン革命でもアナキストが強く、まさにスペイン革命は、アナキスト派、スターリン・コミンテルン派とトロツキー派との対立、そしてスターリン・コミンテルン派の他派への肅正、そして、そういう中で自分たちもフランコ・ファシズムに敗北していく構図がありました。

また、スペイン革命とロシア革命の対比で、ロシア革命は勝利し、スペイン革命は敗北したというところで、マルクス・レーニン主義的な運動の優位性が語られるし、アナキストの一貫した方針のなさを批判しているのですが、コルシュは、そもそもロシア10月革命に至るレーニン以外のボルシェヴィキの日和見主義を指摘しています。

そもそもロシア革命の勝利も、レーニン自身のネップの導入などの挫折の中で、「われわれは現在すぐ社会主義制度を創設出来ないことを知っている——願わくは、この制度がわれわれの子供か孫の時代には確立されんことを」という言葉を残しています。コルシュの「革命史に貢献する」という援用もそれにリンクしていきます 181P。

さて、この本から押さえたことを、そのみならず、そこからかなりはみ出して、わたしが考えてきた論点と交差するところを押さえる作業をしておきます。

まず第一に、コルシユは「社会化」ということで、生産手段の国有化と共同体による分有化問題（この本の中では「集産化」という概念）を取りあげています。マルクス・レーニン主義で重点が置かれている国有化に対し、コルシユは後者を取りあげています。コルシユにはそもそも死滅することへ向かう国家ということをおいていて、国家主義的なことを批判していく志向があるようです。とりわけ、スターリンの一国社会主義建設のなかで陥った、社会主義とは無縁なことに陥ったことへの批判としてわたしは押さえています。

第二に、社会化ということはそれだけでなく、社会主義への移行問題があります。とりわけ、生産と消費の対立の問題を取りあげています。「つまり、一方では、個々の生産部門の生産労働者の利害が、他方では、それ以外の他の生産者と消費者全体の利害があるのである。簡単に言えば、生産者と消費者の利害の対立である。」39P「だが、社会主義の精神における社会化の目的は、消費者資本主義でもなければ生産者資本主義でもなく、生産者と消費者全体のための本当の共同所有なのである。」40P

そこで、中央集権的生産・国有化と生産現場のサンディカリズム的生産の二様のあり方、前者が国家による労働者の搾取ということに陥ってしまう危険。後者の「産業自治」の概念52P。分配・消費における、各生産団体における分配と中央集権的分配との調整。

また、社会化における「教育」ということの大切さを取りあげています63P。教育というのは公教育だけではなく、労働者や民衆が、党や労働組合の学校や講演会、そして何よりも運動の中で実践的につかんでいくということも含めて言えることだと押さえることですが。

第三に、精神労働と肉体労働の分業問題。

形式的「分業の否定」では解決できないことをコルシユは指摘しています。教育と物質的生産の結合。これはわたしのとらえれば、決定という精神的労働からの排除の止揚を核として、精神的労働の肉体的労働への優位性を解体していくこと、解体できることとして押さええます(農の楽しさ、体を動かすことの楽しさなど)。

第四に、中央集権主義と共同体分権主義との問題。

武装蜂起——国家権力の奪取——(プロレタリア独裁権力の樹立としての)ソヴィエト(評議会)政府の樹立という路線では、中央での攻防がかぎを握り中央集権主義に陥っていくのですが、下からの革命や評議会運動的なところでは、共同体的分権主義的運動が留意されます。またエコロジー的観点からも、地産地消という地域からの変革ということの重要性も指摘されています。また、サブシステムというところから農の重要性の指摘もあります。どちらかという二者択一的でもないでしょうが、そして革命の貫徹というところでは、中央集権的革命も必要になるのでしょうか、そのあたりはまさに弁証法的に進んで行くことだと押さえることではないかと思えます。

第五に、評議会運動の意義。

スペイン革命時に中小企業の右翼経営者が逃げ出したというところで、労働者の経営者も巻き込んだ自主管理的運営が成立したようです。このことは、オキュパイ闘争という形での展開ともリンクします。日本でも潰れた会社の労働組合管理による運営というようなこともありました。また、関西生コン労働者組合の大手ゼネコンに対する、中小経営体を巻き込んだ協同組合的自治の実践があります。これがまさに評議会運動的な意味をもって

いるところで、国家権力からのかつてない弾圧に曝されているのではないかと押さえられています。

さて、現在のには、連合的な労使協調路線の下に、労働組合運動が抑え込まれています。それを食い破る労働運動は、個別争議での、また職場でのパワハラ問題などの反差別的なところからの、運動の中から、総体的課題での評議会運動的な組合の再編が必要になってくるのではないかと思います。とりわけ、正規——非正規との分断を超える運動の創出が問われているのではと。

第六に、サンイディカリズム——アナーキズムとの対話。

マルクス／エンゲルスの運動や理論化は、アナーキズムとの対抗関係で進んでいきました。アナーキズムと言っても一様ではないのですが、マルクス／エンゲルスのアナーキズム批判は、ブランキ派の一揆主義的運動、すなわちきちんとした方針を立てない、もしくは状況分析を過てる運動批判。また、経済的なところを押さえない、マルクス／エンゲルスの打ちたてた唯物史観的観点のない主意主義的政治主義批判として出てきました。ただ、マルクス・レーニン主義が陥ったことも含めて、今日の闘争点が国家主義とその批判に当てられているとき、アナーキズムの突き出している反国家主義は、下からの運動、サンイディカリズム的なところの評価、評議会運動的なところの評価とともに、採り入れていくことではないかと思います。

第七に、共産主義の基底としての反差別。

さて、コルシユがパリ・コミューンの形式民主主義批判をしていたのですが、今日的にコミューンということをとらえ返すとしたら、即ち運動的共同体作りの核をどのように形成していくのかと言えば、それは反差別論的なことを基底としていくということではないかと思います。現在の浮かび上がっている争点は、格差貧困問題、正規——非正規との分断問題。パワハラ・セクハラ問題。また、福祉が恩恵としての福祉という枠組みから抜け出せないのか等々。そしてそもそも民主主義（これをわたしは民衆主体主義と読み解きます）を標榜する社会で、王制や天皇制などがなぜ存在するのか、国家神道という流れから戦争を進める軸になった靖国神社などがなぜ存在し続け、政権与党を軸に参拝を続ける事態が存在するのか、どうしても理解し難いことがあります。それらのことは、今日外国人労働者なしには日本経済は成り立たなくなっている時に、むしろ国家主義的な差別を懐胎して進んでいるのです。まさに差別——反差別ということが、攻防の軸になっていくのではと思います。第一から第六としてあげたことを、反差別論というところから再度とらえ返した運動と理論的深化の中から、運動の共同体作り、コミューン、評議会的運動として推し進めていく必要があるのだと考えています。

さて、もうひとつ、詰め切れていない問題があります。プロレタリア独裁ということは必要なかということです。そもそも、マルクスやレーニンの時代は、王制や専制支配の時代でした。今日的に、民主主義を標榜する時代になっています。ただ、まだその中で、王制は存続し続け、哲学の世界で「神は死んだ」と宣言されても、宗教が存続し続けます。そして、トランプのような国家主義者がアメリカの大統領になり、ヨーロッパでも極右政党の伸張が出現しています。日本でも、極右国家主義者の安倍前首相が、様々な粉

飾をこらしつつ、七年八ヶ月政権を続けました。また、マルクスの唯物史観の定式からすると逆の、経済は資本主義なのに共産主義を標榜する中国共産党の覇権主義的専制的支配も続いています。少しずつ民主化を進めようとしたミャンマーでは軍事クーデターが起きました。革命史をとらえると、革命的なまた民主主義的運動が進むとき、右翼クーデターが起きるのは必須のようです。そのような時、「独裁＝軍事的なこと」が、否定できるのかどうか、むしろ疑問になります。長いスパンの構造改革的革命という道はあるのでしょうか？

あらゆる想定をしつつ、それを見越した計画を立て、状況分析をきちんとして、きちんとした対応をしていくしかないことです。とにかく、極右勢力の国家主義的なことに対し、反国家主義ということを中心とした民衆運動の幅広く深い反差別運動を進め、理論的深化を勝ち取っていかなくてはなりません。

たわしの読書メモ・・ブログ 559

・ラーヤ・ドゥナエフスカヤ／三浦 正夫・対馬 忠行訳『疎外と革命—マルクス主義の再建』現代思潮社 1964

この本の著者は、たわしの読書メモ・・ブログ 546・トニー・クリフ／浜田泰三・西田勲訳『ローザ・ルクセンブルク』現代思潮社 1968 で、付録的に「ローザ・ルクセンブルクの蓄積論」という文を寄せていて、それで読んでおこうと古本で買い求めました。「訳者あとがき」に、著者はメキシコで亡命生活をしていたトロツキーの秘書をやっている、ロシアを労働者国家と規定するトロツキーと決別したとあります。インターネットで検索しても著者のプロフィールはアメリカで評論的活動していた以外には、ユダヤ人ということしか出てきません。

ちなみにこの本の原書のタイトルは『マルクス主義と自由——一七七六年から現代まで』です。

さて、わたしはたいてい、本を読み始めたら最後まで読むのですが、この本はあやうく最初の方で投げ出しそうになりました。ですが、投げ出さず読み切ることによって、かなり得ることの多い本でした。すなわちラッサール批判、アメリカ南北戦争の『資本論』におよぼした影響、パリコミューンの押さえ、『資本論』の押さえ、各インターナショナルの押さえ、レーニンとトロツキーとシリャプニコフの間に交わされた労働組合論争、そして、新経済政策から各次の5カ年計画の押さえ、「現代的な押さえ」としてのロシアとオートメーション化するアメリカということを押さえ、最後に毛沢東の中国革命論批判を書いています。

このひとはロシアを最初に国家資本主義と規定したひとりのようです。今、この規定は、自民党の中で、一応理論を問題にしているひとの間でも、中国の経済規定として常識になってきているようです。

さて、最初にこの本を途中で読むのを止めようと思った理由ですが、①共産主義の規定をしないまま、共産主義批判に踏み込んでいること。②マルクスの『経済学・哲学草稿』を過大評価し、そこに依拠して人間主義を突き出していること。③レーニンの評価、とり

わけヘーゲリアンとしてのレーニン評価に陥っていること。

まず①ですが、どうも空想的社会主義者とかアナキスト的な「共産主義」批判と、スターリン的な一党独裁の共産党の支配を「共産主義」の罪として全部かぶせて、共産主義批判を展開しているのですが、そもそも共産主義をなぜ、どのような内容でマルクス／エンゲルスが突き出したのかということを押さええていないようです。『ドイツイデオロギー』の中に、「分業と私有財産制の止揚としての共産主義」という内容の規定がありますが、そもそもそのような規定もなしに、共産主義批判をしています。一方で、現実には「共産主義」として突き出された運動が「マルクス・レーニン主義」として出されたのですが、スターリン主義批判はこの著者の要ですが、「マルクス・レーニン主義」の批判がないのです。丁度、共産主義と「マルクス・レーニン主義」の評価がわたしサイドからすると真逆になっています。

次に②ですが、スターリン批判の中で、マルクスの『経済学・哲学草稿』の見直しということが、世界的に進められました。この著者はそこに棹さしているようです。今日的に、マルクスの転換と言われていることが二つあります。ひとつは、『経済学・哲学草稿』から『ドイツイデオロギー』に至ったマルクス／エンゲルスの転換です。実は、これは『経済学・哲学草稿』でのフェイルバッハへの共鳴から、『ドイツイデオロギー』ではフェイルバッハ批判に転じているのですが、それはフェイルバッハの類的存在という突き出しからする人間主義的なところへの批判の展開としてあり、それが『資本論』の中での物象化概念の突き出しに至っているという、わたしが認識論的に影響を受けた廣松渉さんの「疎外論から物象化論へ」という押さえがあります。もうひとつの展開は、これはエンゲルスは転換しそこねているのですが、マルクスが「古代社会ノート」などの研究からアジア的生産様式の発見から、自らの発達史観なり進歩史観の見直し作業を「資本論草稿」の中でやっていたという転換です。これは後述しますが、反差別という処からすると重要な押さえになります。さて、著者の時代では、まだ後者は出ていませんでしたが、前者の転換を押さえ損なっています。だから『経済学・哲学草稿』の過大評価に陥り、「疎外革命論」に陥っています。これは「本来の人間像」からの疎外というところで、「本来」を設定するという抑圧の論理とリンクしかねません。インターネットでこの著者の名で検索すると、革命的共産主義者同盟中核派がこの著者を日本に呼んで、各地で講演会をしたという記述が出ています。まさに、疎外革命論的なところでの展開になっています。

最後に③、レーニンの過大評価です。これは、レーニンの中央集権主義や前衛党論に見られる党の位置づけなどが、スターリン主義とどう結びついているかを著者はきちんと展開していません。そのあたりは、「……そこで、彼（レーニン）はのべた。——いまやロシアの現実、下部の党員が指導部よりも十倍も革命的であり、党外の大衆が党よりも十倍も革命的だということを示したと。」392P（この話はジョン・リードの『世界をゆるがした十日間』岩波文庫にも、リードのレーニンへのインタビューへの応答として出てきます）としてレーニンは民衆の革命性を評価していたとしているのですが、確かにリアリストのレーニンは、きちんと自らの理論を修正していて、現実には当てはめていく柔軟性をもってはいたのですが、一党独裁の根拠になっていく前衛党論を否定するものではありません。この文言は、他のオールド・ボルシェヴィキ批判であって、レーニン自身の前衛

としての立場は維持されているのです。著者のレーニンへの批判が欠落しているのです。もうひとつ、著者はレーニンが『資本論』を真に理解するためにはヘーゲルを理解しなければいけない」とした、まさに「ヘーゲリアンとしてのレーニン」とまで言える、レーニンのヘーゲルの過大評価の問題があります。初期のマルクス／エンゲルスは、ヘーゲルは逆立ちしているという批判をしていました。それは観念論の唯物論への転換ということの意味していたのですが、著者は、そのあたりも線を引くことに反対しています。確かにタダモノ批判という意味もあるのですが、それでも唯物史観的とらえ返しの必要はあります。このあたりは、今日的には（わたしサイドからすると廣松理論からのとらえ返しになります）、ヘーゲル弁証法の存在論と認識論と論理学の三位一体性への批判となります。単に逆立ちしていることを戻すということではなくて、三位一体的展開としてしまうと、ヘーゲルの絶対精神の自己展開としての疎外・外化ということを認めてしまうのです。これは観念論そのものになってしまうという批判です。ここで、「疎外・外化」という概念が出てきていることに留意することです。ですから、「存在論としての弁証法」を認めると観念論になってしまうのです。後期エンゲルスが、マルクス主義の解説者として、弁証法の図式化に陥り、法則としての弁証法を突き出しました。エンゲルスはマルクスとともに青年ヘーゲル派として出発した地平から、青年ヘーゲル派内部論争を経て、自らの哲学を形成したのですが、後期エンゲルスはヘーゲルへの先祖返りに陥ったことと同じ地平にレーニンも陥っているのです。ヘーゲリアンのレーニンを全面賛美する著者も同じ地平にあるのです。

さて、ここでいろんなことを書きましたが、この本を放り出そうとして読み続けて収穫が多かったと書いたこととして、この本との対話の中で、著者の共産主義批判をわたしサイドからとらえ返してみます。

それは晩期マルクスの転換とも繋がっています。すなわち、イギリスのインド支配を「文明による野蛮からの解放」という概念でとらえていた差別的なところから、転換していく観点が出ているということです。わたしは、そこからもう一步踏み込んだ、共産主義の基底としての反差別運動ということ、「障害者運動」の中における発達保障論批判ということから、それまでのすべての差別的な価値観を転換していく地平をとらえかえすことができると考えています。それらのことをこれまでの科学による自然支配とか、発達信仰のようなことの中で、さまざまな資本主義的な悪無限的な利潤追求と経済成長主義が世界に何をもたらしてきたのか、新自由主義的グローバリゼーションの進行のなかで、さまざまな環境破壊や核兵器や原子力産業の推進のなかで、さらにバイオテクノロジーの進行が人類の滅亡の危機さえ招き寄せているとしかとらえられないのです。ここから、根本的な価値転換による新しい社会を作り得る可能性は、反差別共産主義ということしかないのではと考えています。

若干の覚え書き的メモを残しておきます。問題意識から記憶を呼び起こし、メモと照らし合わせたので、順不同です。

「ソヴィエトが出現するまでは、誰一人ソヴィエトが出現しつつあることをいいあてることはできなかつたろう。……一九〇五年のソヴィエトのことを記憶し、そうしたヴィジョンと行動をまもりつづけたものは、ただひとりロシアの労働者だけだった。こう

して彼らは一九一七年にソヴィエトを再び創造したのだ。……」391P・・・1905年のソヴィエト、そして1917年2月のソヴィエトも、けっしてレーニンの前衛党の指導によったものではなくて、自然発生的評議会運動としてあったこと。しかし、レーニンもローザもソヴィエトを積極的立てなかった。ローザにはゼネスト的展開はあったけど、組織論がなかったゆえに、ソヴィエトをたてえなかった。どちらでも議長になったトロツキーは乗っかっただけだったのでは？

いかなる階級にも属さない——技術的インテリゲンチヤの支配 310P・・・支配層としての技術的インテリゲンチヤは「階級に属さない」のではなくて、階級概念ではない支配層で、被支配者が労働者階級という、労働者搾取国家——国家資本主義。

死んだ労働の生きた労働への支配 325P・・・疎外された労働ということの意味、ただし、これが基底としてあるわけではないのでは？

「マルクス主義的人間主義」「人間の根底は人間である」458P・・・まさに人間主義。科学主義と人間主義の二分法的対立図式の止揚が必要になっているのでは？

一巻の最後が本源的蓄積論であることと、第四巻として「剰余価値学説史」をもってきたこととの通底 200P・・・時系列では本来最初にもってくることを、論理的展開として、付記的に書き足したという構図。

「レーニンにとっては、大衆とは、社会主義という「目的」に達する「手段」ではなかった。大衆の自己活動こそが、まさに社会主義なのだ。」262P レーニンの発言の引用「われわれは、労働者がみずからの手で、下から、経済的条件に関する新しい原則を作成することをのぞんだのだ」263P・・・著者のレーニンへの過大評価と、レーニンの発言の矛盾。これを著者の問題意識としての下からの革命と読み解けるのですが、レーニンにそれはあったのでしょうか？ この下からの革命ということが、この著者にはあるのですが、そこからするとマルクス・レーニン主義批判に踏み込むことのはずだったのですが。

「マルクスは、資本主義の分析を、いろんなことなつた抽象の段階で発展させたのだが、こうした各段階はそれぞれ自己自身の弁証法をもっている。第一巻では、われわれに生産の現実を理解させた範疇は、不変資本と可変資本(労働力)であった。第二巻では、われわれはまだ社会の表面にとどまっているのだが、そこでは、社会の内部のメカニズムを暴露する範疇は、生産手段と消費資料であった。そして第三巻では、それは、利潤率の低下、すなわち、「資本主義的生産の運動法則を暴露し、その崩壊を指摘する、資本主義的生産の一般的矛盾」ということなのである。」188-9P・・・ここで、「抽象」という概念を出してきています。著者はきちんとまとめ切れているとはいえないのですが、冒頭に書いたトニー・クリフの本への著者の投稿との対話でも書いていたのですが、マルクスの上向法的展開における抽象は、そもそも第一巻の第一章の価値形態論から始まっていて、そのことをローザは押さえていないで、第二巻の拡大再生産論の批判をしているのです。ですが、それはそれで、多分、第一巻の本源的蓄積論の後に、もしくは「剰余価値学説史」の前に、マルクスの「帝国主義論」として展開する必要があったことです。

## 映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 051

・BSTBS「報道1930」6月11日19:30~21:00「新しい「脱成長」の考え方」

大阪市立大学教員の斎藤幸平さんがゲストでした。このひとの書いた『人新世の「資本論」』集英社新書2020という著書が30万部を超えるベストセラー・ロングセラーになっているそうです。消費からの変革ということで、世界全体の2%の富裕層が排出炭素の40%を占めているということを是正していく話をしていました。それだけでしたら、今流行のSDGsなのですが、このひとはSDGsも批判するのです。要するにSDGsというのは、持続可能な資本主義、持続可能な成長経済という論理なのですが、このひとは、成長ということを捨てるしかない、しかし、資本主義というのは成長なしに存続し得ない、従って、資本主義をやめるしかないというはなしまで展開しています。脱成長コモニズム——コミュニティの話です。そして、バルセロナの女性市長の元で、車をチャットアウトした空間作りをしている話なども出していました。

この日は、アメリカ人（アメリカ国籍）の漫才師から転じて政治へのコメンテーターとして活躍しているパクンが出演していたのですが、斎藤さんに「なぜ、持続可能な資本主義ではいけないのか」という突っ込みをしていました。まあ、資本主義は経済成長なしには継続し得ない、新自由主義的グローバリゼーションは、格差の拡大と矛盾の民衆への転化という差別主義的政治を展開していくので、ますます矛盾が拡大していくところで、資本主義終焉の主張になっているのですが。

とにかく、大学でマルクスの流れの学が踏み絵的に消えていって、もうずっとマルクスというところをとりあげることがテレビの番組でなくなっている時に、マルクス派の経済学者がテレビに出ていて、また本がベストセラーになっているとのこと、潮目が変わってきているのかもしれませんが。この本を買い求めました。読書メモでまた取りあげます。

たわしの映像鑑賞メモ 052

・UPLAN 天笠啓祐「一線を越えた生命操作～新型コロナワクチン・ゲノム編集食品・RNA農薬～」DNA問題研究会シンポジウム2021.6.13

パソコンを操作していたら、パソコンの機能で、この動画の案内が出てきて、丁度ワクチン問題でのいろいろな議論に感じていることがあって、この動画を見ました。天笠さんの講演やシンポジウムには何回か参加していて、本も何冊か買い求めています。まだ、ほとんど積ん読状態ですが。遺伝子操作、さまざまなバイオテクノロジー技術の危うさということを指摘してくれているひとです。

シンポというか、講演だったのですが、この話はサブタイトルにあるテーマに沿って話が進みました。かなり勉強していかないと、ついていけない内容なので、いつものように本にも書かれていくようですので、また買い求め読もうと思います。ここでは、コロナウイルスワクチンの問題で押さえて置きます。このワクチンは、多量の遺伝物質を投入し、通常七・八年から十年かかる基礎研究と動物実験、ヒト検証を経ないで、遺伝子毒性試験や後になって出てくる発がん性試験も経ないで作られた、ワクチンだということです。

さて、この講演会を観ていて、そこで語られていたことを、コロナウイルスに論点をし

ぼる形でわたしサイドの意見としてまとめてみたいと思います。

先ず、①安全性が立証できないことは、手を付けてはいけないという原則を確立することです。コロナウィルスワクチン、ちゃんと安全性が立証されているとは思えないのです。少なくとも手放しでワクチン接種推奨をすることではないと言えます。次に②に、ファイザー社、モデルナ社のワクチンも何れも、mRNA を使ったワクチンです。「特例」と言うことで承認されているのですが、遺伝子操作ワクチンの使用はきちんとした検証が必要で、これを契機にして、遺伝子操作技術の歯止めのタガが外されることに警鐘を鳴らして行く必要があります。③に、そもそもバイオテクノロジーの技術には、その行き着く先の、優生思想的な人間観や世界観、すなわち、デザイナーベビー的などところに至り着く、ひとのモノ化、生命の軽視、ヒトという種の絶滅につながりかねない恐ろしさを内包しています。そのようなことも含めて、人間観、世界観から、バイオテクノロジーということをとらえ返し、そこから現実的に起きてきていることをひとつひとつ検証していくことが必要になっているのではないのでしょうか？

## インターネットへの投稿から

### 2021.6.18 マスコミのワクチン接種推奨への疑問

マスコミがワクチン推奨の一翼を担っているのですが、このワクチン mRNA を使った遺伝子操作ワクチンなのです。遺伝子組み換え食品への警鐘とかがずっとあったのに、そのあたりのことをマスコミは何もとりにあげません。昔、遺伝子工学をやっていて、そこから反対に転じたひとが、「遺伝子操作は原子炉溶融よりおそろしい」と書いていました。今、マスコミがとりあげているのは、早発の副作用だけ、しかも 196 人の死者が出ているという報告があるのですが、それを大きくとりあげてません。日本のコロナウィルスでの死者、政府関係発表では 15000 人弱です。その予防のためのワクチンで 1 %以上の死者が出るというのは、ワクチンとして承認できるのでしょうか？ 「因果関係は分からない」という非科学的で、「科学知」からすると破綻した因果論など持ち出しているのです。しかも発熱とか頭痛とかかなりの割合で出ています。もっと恐ろしいのは、晩発性の副作用のこと。しかも、ワクチンが新たな変異を生み出していくという指摘もずっとされています。さらに、この緊急性ということでのワクチン開発で、さらに遺伝子操作技術の規制緩和に進んで行く恐ろしさが指摘されています。デザインベビーとか優生思想的なことが更に進んで行く、実際にそのようなことが進んでいます。「遺伝子操作がヒトという種の絶滅をもたらす」というような恐れを抱いているのはわたしだけでしょうか？ 大規模接種態勢を今現在、こんなに迅速に進めようとしているのなら、水際作戦とともに、PCR 検査態勢をもっと強力に作れなかったのでしょうか？ 感染をかなり抑止できたはずだし、もっと救えた命があったはずです。

### 2021.6.30 マスコミのワクチンに関する「デマ狩り」について

マスコミで一番良心的と思っていた TBS が、急にワクチンに関するデマをとりあげ出しました。それを TBS の報道番組で一斉にやり始めたので、上層部の意図や様々なことを想

起させるのですが、そもそもデマとか風評被害のようなことは、情報公開や説明責任がきちんと果たされないときに起きることです。今回も、ワクチン接種が始まった最初の頃は、「ワクチン接種後の死者」情報も含めて副反応についての報道がかなりあったのですが、腕が上がらないとか、筋肉痛のような軽度のことはとりあげられています、「ワクチンをみんなで打とう」みたいなキャンペーンをマスコミがやっているような状況になっています。一面的な報道はしないということを、過去の反省からそのことを散々問題にしてきたはずなのに、また、同じことを繰り返すのかという危惧を抱いています。

そもそも「デマ」として取りあげられたこと、一面的なとりあげなので、検証しようもないのですが、**いくつか**指摘しておきます。まず、「治験がなされていない」ということですが、これは「治験がきちんとなされていない」と書いたらデマにはなりません。「これは特例承認のようなこととして始められたことで、緊急事態ということで治験がかなり省略されている、モニタリングをなしながら進められている」と書いたら「科学的知見」になるのでしょうか？ でも、「治験」というのは、それ自体で一応完結する事が必要なのだと思いますが、モニタリングと共にやっているという特例的な進行なのですね。そもそも、アジア的感染状況の違いもあってか、国内治験が必要と言うことで、進められている最中に、政府がワクチン接種の計画発表とか、そもそも承認されることを前提にして動き出していました。特に、この間の村度政治の中で、「治験」なるものが形**だけ**だとみんな感じていたのではないのでしょうか？ それに、そもそも早発性の副反応だけしか検証されていないのです。後発性の副反応は、何年もかけてやることではない**で**しょうか？ 場合によっては何十年になるかもしれないと思っています。もうひとつ妊婦の接種で、「妊娠していたひとや、その後妊娠したひとから、副反応の影響のようなことは報告されていない」という話も出ているのですが、何を言っているのか分からないのです。妊娠初期に打ったひとは、まだ子どもを産んでいないですよ。流産以外は検証しようがないですし、そもそもいろんな関係の一変数ということになるので、統計学的手法を用いないと検証できません。統計学的手法で検証する程のデータがあるのでしょうか？

それから、「報道 1930」で、「遺伝子変異をもたらす、不妊がひろがる」という項目がありました。これは繋がる可能性はあるかもしれませんが、二つにわけて考えることです。「遺伝子変異」については、わたしはニュースで取りあげられているのを観たのは「報道特集」の膳場キャスターが、「mRNA は二重螺旋の DNA と違って一重で不安定ですぐ壊れるから、遺伝子変異はもたらさない」というような発言だけです。その時に、「そもそもそんなに不安定ですぐ壊れるなら、機能しないのではないか」とふと思ったのですが、最近観たビデオ([\(276\) 20210613 UPLAN 天笠啓祐「一線を越えた生命操作～新型コロナワクチン・ゲノム編集食品・RNA 農薬～」 - YouTube](#))で、このワクチンには安定化させるための薬品アジュバントが入っているとの話がありました。で、「遺伝子変異をもたらす」ということを「デマ」とまでいうなら、ちゃんと、全ての疑問に答えていく必要があると思います。番組もそのようなことをとりあげていくことだと思います。

で、「不妊」の話ですが、これはそもそもヒトの精子の量が減っているという話で、その話がどこから来ているのかということで、政府は不妊治療にお金を出すとか言っているのですが、その「ヒトの精子の量の減少」という基礎研究にお金を出そうとしているのでし

ようか？ そのようなことの考えられる「要因」のひとつが、環境要因と言われている、その中でいろんな化学物質のみならず「遺伝子組み換え植物・動物」の摂取の話も排除できないことになっているのではないのでしょうか？ 「デマ」と規定するなら、立証責任は「デマ」と規定する側にあるのではないのでしょうか？ ちなみに、この遺伝子操作ワクチンの流布の中で、「遺伝子組み換え食品表示」をしないという動きにも拍車がかかるのではないかという危惧が出てきます。

コロナウィルスの問題でいろんな報道番組をみているのですが、BS フジのプライムニュースで、西村大臣がワクチン接種の頭打ち問題で、ワクチン接種だけでなく、検査も拡大していくという話をしていました。何度同じ話をしているのでしょうか？ そもそも「なぜ、検査が進まないのか」ということを「報道 1930」がずっと追いかけてきました。政府や地方自治体の首長が検査を拡げると言いつつ、口だけ政治でやってこなかった中で、まさに何度も緊急事態宣言発出にいたっている失政になっている、このことをきちんととらえ返さないで、ワクチン接種一辺倒に陥っていて、変異株などが出てきて、どうなっていくのか、民衆の不安ということの中での、いろんな発信がでてくる、そんなことの元をきちんと押さえた報道が今、必要になっているのではないのでしょうか？

#### (編集後記)

- ◆今回も「普通に」読める分量です。しばらく、このくらいの分量でまとめます。
- ◆今回の巻頭言は、専門性というところでの批判、個人名をあげた批判は、政治家以外はできるだけ避けたいのですが、コロナウィルス感染症対策失政というところで、専門家といわれるひとたちの責任の重さを痛感しつつ、あえて踏み込みました。映像鑑賞メモの後半とそれへの編集後記の文ともリンクしています。なお、この文章を書いたときから、刻々とオリンピックの対応も変化していますし、ワクチンの副反応接種後の死者も増えていきます。書いた時点での、状況のままにしています。
- ◆「読書メモ」は、古典学習から発生した本二つです。次回は民族問題に関する学習補追です。その後、障害関係の積ん読している本を読みながら、現在の問題に関する本も同時進行して読んでいく予定です。
- ◆映像鑑賞メモは、ひとつは、最近珍しい、若い大学教員の「マルクス経済学」に関する本を出しているひとがテレビに出て話していたコトへのコメント。もうひとつは、科学やバイオテクノロジー関係の研究の危うさに警鐘をならし続けている天竺さんの講演のビデオの鑑賞メモです。
- ◆「インターネットへの投稿から」は、二つともコロナワクチンに関する事。「2021.6.30 マスコミのワクチンに関する「デマ狩り」について」を出した日に、テレビ朝日の「報道ステーション」で、ワクチン接種後の死者が 277 人になっているという話を出していました。で、その後に、コメンテーターの医者が「ワクチン接種のメリットとデメリットで、メリットが大きいので接種を勧めます」というような話をしていました。よく分からないのです。死んだひとには、メリットなどないのです。7月4日の朝日新聞のGlobeのBooksで

浅井晶子さんという翻訳家がドイツで出された本の紹介「コロナワクチンは救いか」という文を寄せています。()内の斜文字はわたしの補追コメントです。『『コロナワクチン——救いかリスクか?』で著者はワクチンの治験期間が極度に短いと強調する。新しいワクチンの実用化には通常10年前後かかるが、コロナではどの社も普通なら順次実施する治験の各段階を同時に進めて大幅な時間短縮を図った。こうしてEUでは開発開始から1年弱で市民への接種が始まったが、実はどのワクチンもまだ治験中であり、「緊急承認」を受けているに過ぎない。／当然ながら長期的に人体に及ぼす影響は、未知のままだ。実際に別の遺伝子ワクチンでは1年半後に重篤な副反応が確認され、治験が打ち切られた例もある。……コロナワクチンを一概に否定はしないものの、本書に上記のような負の情報が多いいのは、各国の政府とメディアがワクチンを唯一の解決策として強く推奨する一方で、多くの専門家の警告がほとんど取り上げられないことへの危機感からだ。……EUでは大規模接種も進み、血栓症（これは日本ではまだ余り使用されていないアストラゼネカ製のワクチンです）などの重篤な副反応例、死亡例の報告（日本での最近の報告、「因果関係がはっきりしない」とされつつも277名）も上がっている。ドイツでは接種済みの人を対象に徐々に規制が緩和される一方、12～17歳の子供一般の接種は常設予防接種委員会の反対で見合わせとなりそうだ。接種に積極的な人も多いが、本書が刊行後4ヶ月以上売れ続ける事実は、政府とは違う見方や主張も知っておきたいと考える市民が多数いることを示している。」

ワクチンのことで検索していたら、[新型コロナワクチンの副反応疑い報告について | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](#)が出てきます。読んでみると、かつて言われていた「日本の官僚の優秀さ」と言われていたことから隔絶した非論理的文が目につきます。例えば、「知見は得られていません」とか、いう非論理的文でのごまかしです。これは裏を返せば、「可能性は排除できない」ということです。忖度政治のなかで、ごまかしの論法がまかり通り、それが透けて見えるのです。論理的な思考をするひとたちは、逃げ出していったのでしょうか？◆「インターネットへの投稿から」で、遺伝子に関することや、薬害のことを書きました。書きながら、反公害と「障害児・者が生まれる」という言説での障害問題との対立のようなことを想起していました。現在社会で「障害者」と規定されるひとはそもそも自然界でも、一定の割合で生まれてきます。それはむしろ種の多様性というところで、種が存続していくことに必要なことの一環です。多様性のない種は絶滅していくと言われていました。そのことと、自然ということから逸脱した人工物で、ひとに強制していく「変異」は別物です。ですが、そもそも、「純然たる自然というのは、もはやない」という状況になってきています。神ということにとらわれていた時代は、神の掟ということで、科学に対する抑制や倫理がありました。神は死んだとされる現代は、そもそも「神は自然の物神化」というとらえ返しのなかで、自然の征服とか自然を超えるとかいうことがひとや地球の危機を生み出して来たことをとらえ、「自然に適う」生き方、世界観をもって新しい社会・世界の生み直しをしていくことが必要なのだと思います。「自然に適う」というのは、原子力工学から反原子力に転じた、高木仁三郎さんの残した言葉です。

一つ目の投稿には、Facebookのリンクがついたのですが、二つ目の投稿にはつきませんでした。なぜか分かりません。膳場さんの名前を上げてしまったのですが、わたしはTBS

「報道特集」が一番時事解説できちんとした情報と分析と意見を出してくれていると押さえています。専門的知識のリンク先をどうしていくのか、むずかしい問題があります。

◆最近、講演会やシンポジウムに参加することに恐怖のようなことを感じ始めています。3年位前まで、毎週一回は集会で手話をつける試みをしていました。で、そこから離脱して以降、手を動かすことがなくなって、しかもコロナウィルスで、講演会やシンポジウムのようなことがなくなるリモートになっています。手話を付けていたときは、どのような集会や講演会など、もしろう者の参加があれば、対面でも手話をつけなくてはという思いで、黒っぽい服で参加してしていました。それがなくなって、使命感で手話をつけていた意識にからだがついていかなくなって、その上に、今までの通じなかった経験や失敗などの体験ばかりが思い出され、恐怖感が湧き上がってきています。それで講演会への参加自体に恐怖を抱き出しています。しばらくしたら消えるのでしょうか？

## 反障害－反差別研究会

### ■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされてきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害－反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>